【報　告】

# 2022 日韓共同高等教育留学生事業<br>学部短期課程報告

齊藤ゼミナール
（文責：齊藤良子）

目　次

1　はじめに
2　入国日
3　韓国語特講および日韓翻訳実習
4　日韓異文化コミュニケーションおよび映画でみる日韓社会と文化
5　韓国民俗村
6　文化体験
7　終わりに

## 1. はじめに

本報告は，韓国の首都であるソウルにある徳成女子大学で 2022 年 8 月 8 日から 8 月 19 日に行われた 2022 日韓共同高等教育留学生事業学部短期課程（以下「短期課程」）の報告である。国士舘大学政経学部政治行政学科に在籍する齊藤ゼミナールは韓国事情研究を主に扱っており，今回報告する短期課程は，「1. 未来指向的日韓関係を築く高級人材の養成及び両国間の親善の増進」,「2. 大学の国際化及び両国間学生の交流の機会を提供する」,「3. 韓国に対する理解を深めるとともに，友好的知韓派人材の育成」の目的のもと，日本の文科省にあたる韓国の教育部の支援により学費，渡航費，滞在費，食費等を含む全ての教育費用一人あたり 500 万ウォン相当（約 50 万円）が奨学金として提供されるものであった。本短期課程は 2020 年から開始される予定であったが，新型コ

ロナウイルス感染症拡大の影響により延期され，第 1 回目は 2021 年にオンラインにて実施された。そのため，対面で行われるのは今回が初めてであった[1]。

短期課程の内容は「韓国語特講」「日韓翻訳実習」「日韓異文化コミュニケーション」「映画でみる日韓社会と文化」「韓国文化体験」等の授業で構成されており，体系的に日韓異文化コミュニケーションについて学ぶものであった。

本短期課程には本学から 4 名，宮崎大学から 2 名，筑紫女学園大学から 15 名が参加したが，本学からは齊藤の担当する専門ゼミナール II に在籍している 4 年生の黄川田萌恵，熊谷怜と，基礎ゼミナールに在籍している 2 年生の加藤颯，佐藤勇太が参加した。本報告は本学の参加学生による報告レポートをまとめたものである。

## 2. 入国日

### 熊谷　怜

本短期課程の開始は 8 月 8 日からであったものの，オリエンテーション等のため 8 月 5 日に渡韓となった。当日は羽田空港から金浦空港への 2 時間半のフライトの後，入国審査を終え荷物を受け取りゲートから出ると，徳成女子大学のプレートを持った女性が見えた。韓国に着いた実感がないまま，大きなトランクを引きながらそのプレートに向かった。挨拶をすると入国前から質問に答えてくれていたキム・セヨンさんとキム・エリンさんだった。先に入国していた宮崎大生と入国後 24 時間以内に受けることが義務付けられている PCR 検査を受けた後，徳成女子大学のキャンパスに向かった。

大学到着後すぐに寮に案内され，荷物をそれぞれの部屋に置き，敷地内に入る際に必要な指紋登録を行なった。本短期課程を通して日韓の電子化の差を感じたが，その中でもセキュリティー面は顕著に感じた。徳成女子大学のノ・ジュヒョン教授によると，特に徳成女子大学はセキュリティーに力を入れており，韓国内でも厳重な警備だとのことだった。そのためか，指紋認証のゲートの横には常に男性の警備員がついていた。指紋登録後は自由時間であったため，大

学の最寄り駅である水踰駅方面へ散策がてら観光しに行き，その日を終えた。

## 3. 韓国語特講および日韓翻訳実習

**加藤　颯**

3. 1. 韓国語特講

韓国語特講はⅠからⅢまでの全3回の授業であり，韓国語や韓国文化について学ぶ授業であった。当初，韓国語特講Ⅰから開始される予定であったが，担当教員が体調不良であったため，韓国語特講Ⅲから行われた。この授業では，はじめに一人ずつ韓国語で名前や趣味，好きなものなどの自己紹介を行った。私は韓国語があまりわからないので自分の名前を言うことぐらいしかできなかった。しかし，他大学の留学生は韓国語で名前以外の自己紹介をたくさんしていた。さらに，この授業は，はじめから韓国語のみでの授業であり，先生が日本語を一切使うことなく進めていくものであったが，宮崎大学，筑紫女学園大学からの参加学生は韓国語だけの授業でも聞き取ることができており，とても韓国語のレベルが高いと感じた。授業開始時はホワイトボードに書かれたことや他大学からの参加学生に教えてもらいながらでしか理解することができなかったが，先生などに身振りをつけながら教えてもらううちに少しだけではあるが自分でも理解することができるようになった。

韓国語特講Ⅰは，韓国語特講Ⅲとは異なり，韓国語と日本語の両方を使いながら進められた。この授業では，韓国語の文字であるハングルの基礎を学び，国の名前や職業などの韓国語での言い方を学んだり，会話において必要なキーフレーズを一つずつ覚えながら短い会話文を理解したりするものであった。特に，文と文をつなぐために必要な接続詞や「です。ます。」といった言葉を使うときに何を使ったら適切なのか，韓国で外食をする時に自分の食べたいものや個数を注文するのに使う「～個」などの助数詞や食べ物の韓国語などの会話の基本となるものについて学んだ。さらに，韓国語での1から1,000までの数字の数え方や料金の言い方なども学んだ。

そして，韓国語特講Ⅱでは，韓国語で韓国にある光化門等(2)の門についてや地下鉄やバスなどの乗車の仕方，降車の際に気を付けなければいけないこと，韓国料理の紹介，食事をする際に気を付けなければいけないマナーを学んだ。さらに，韓国のショッピングモールについての紹介や韓国で買い物をする際の決済方法はクレジットカードが多ことや韓国の伝統衣装であるチマチョゴリについてなど多くの韓国の生活方式などを学んだ。

3．2．日韓翻訳実習について

本授業は全 4 回の授業であり，徳成女子大学の日語文学専攻サークル「翻楽」の学生とともに日本語から韓国語および韓国語から日本語への翻訳について実習を通して学ぶ授業であった。一回目の授業ではオリエンテーションが行われた。翻楽は毎年日本の本を韓国語に翻訳して eBook 版を出版しているが，本授業は翻楽の部員たちが日本語の小説である『世界から猫が消えたなら』(3)を韓国語に翻訳し，その翻訳を再度日本語訳したものに対して短期課程に参加している日本人学生がコメントをしていくものであった。授業では主に日韓の相違点や翻訳においてどのような部分が難しいかなどを考えた。

二回目の授業では，翻楽の部員が授業に参加し『世界から猫が消えたなら』の翻訳作品を紹介した後に 4，5 人ほどのグループにわかれて適切に翻訳できているかについて意見交換をしたり，翻楽の人達が分からなかった日本語を一緒に考えたりした。

三回目の授業では，二回目の授業で紹介された作品についてさらにキャラクターや事件のことなどを日本語で説明してもらい，また分からなかった日本語などを一緒に考えた。さらに，日本と韓国でペットによく付けられる名前を出し合ってどのような違いがあるかなどを話し合った。

そして，四回目の授業では，自分のお勧めの日本の作品をグループで紹介しあい，そこから一番良かったものをグループごとに発表をした。これらの授業を通して日韓の相違点や言語，文化など様々なことを学ぶことができた。

## 4. 日韓異文化コミュニケーションおよび映画でみる日韓社会と文化

**黄川田　萌恵**

ここからは，文化に関する授業であるノ・ジュヒョン先生の「日韓異文化コミュニケーション」，キム・キョンスク先生の「映画でみる日韓社会と文化」について述べる。どちらの授業も各 4 回ずつであり，日本語と韓国語の二言語で行われたため，韓国語が全くわからない受講者でも理解しやすかった。

### 4. 1. 日韓異文化コミュニケーション

ここでは「日韓異文化コミュニケーション」の授業内容について述べる。まず，文化の概要について学んだ。トータルカルチャーとサブカルチャー，見える文化と見えない文化，個人的・社会的・普遍的な面が影響して行動が起きるという 3 つのポイントが提示された。トータルカルチャーとは日本文化，韓国文化，中国文化など国単位での文化のことを指し，サブカルチャーとはトータルカルチャーの中に存在する小さな文化，例えば食文化であれば日本では箸を使用し，韓国は箸とスプーンを使用することなどを指す。見える文化とは，例えば食事のときに箸を使用する，など可視化されている文化のことを指す。見えない文化とは，無意識に行動することが文化となっていることである。例えば，日本であれば「部屋に入るときは靴を脱ぐ」などである。文化形成には 3 つのポイントがあり，それらを互いに理解し合うことがとても大切であると学んだ。これらを前提に，衣食住や挨拶などの日常生活に関することや，アニメ・音楽・大学生活などのテーマごとにグループで日本人学生と韓国人学生で話し合うなどして，日韓の相互理解を図った。

4 回目の最終授業では，日本人学生と韓国人学生それぞれが感じたり思ったりしたことをレポートにまとめて発表をした。日本人学生は，ノ・ジュヒョン先生の講義を受けたり，韓国人学生と関わったりしていく中で，日本の文化や個人のアイデンティティを改めて見つめ直す機会となった。この授業で学んだのは短絡的な考えで，日本（人）はこう・韓国（人）はこう，などといったよ

うに決めつけてはいけないということである。どのような要素が影響し合って，行動が行われるのか，文化が形成された過程を考えながら，興味を持って相互に理解し合おうとする姿勢が大切であることを学んだ。

4．2．映画でみる日韓社会と文化について

ここでは「映画でみる日韓社会と文化」の授業について述べる。この授業の1回目と2回目は，担当講師のキム・キョンスク先生がコロナウイルスに罹患した影響で急遽オンライン授業に変更され，3回目と4回目は対面形式での授業が行われた。また，当初のスケジュールでは数日にわたって1コマずつ行われる予定であったが，全授業が1日で行われることになった。オンライン授業は，寮の各自の部屋で動画を視聴し，感想を提出することをもって出席とみなされた。授業ではキム・キョンスク先生が見やすいよう短時間に編集した日韓の映画をみて，文化の軸に沿って解説がされていった。日本の映画では『おくりびと』(4)，韓国の映画では『君の結婚式』(5)を，両国の映画比較では『SUNNY』(6)と『リトル・フォレスト』(7)を視聴した。これらの映画では，冠婚葬祭における日韓の文化の違いや，同じ映画でも表現の仕方が異なっていることを基に授業が進められた。

冠婚葬祭においては，日本では墓地が街中に見られ家ごとに墓碑が建てられるのに対して，韓国では街中ではなく人里離れた山の上に墓地があり個々人の墓碑が建てられている点に驚いた。結婚式においては，日本では近年はウェディングドレスで挙式を行ったり，女性が白無垢を，男性が袴を着て行われる神前結婚式も一般的であるが，韓国では女性はウェディングドレス，男性はスーツで行われる西洋的なものが一般的である。ただし，結婚式を行う前に結婚写真を撮るために夫婦で韓服を着て景福宮(8)などを訪れることはあるそうだ。冠婚葬祭は日韓で多少違いがあるものの，冠婚葬祭における人とのつながりを大切にしていることは共通しているということを再確認した。

また，『SUNNY』では，日本版では安室奈美恵やルーズソックスなど，女子学生の社会現象が全面的に表れており，一方，韓国版では軍事政権などの歴史

的背景と，学生同士の攻防戦を重ね合わせながら表現されているところが印象的だった。このように，同じ年代でも象徴するものが日韓で異なることや歴史的背景を知ることができた。『リトル・フォレスト』では，田舎を描写するのに日本版では四季を表すなど自然をメインに切り取っていたが，韓国版では郷土料理や食物を生育するなど食に関することをメインに切り取っていたことが印象的だった。日本では「今日は良い天気ですね」など天気に関することを挨拶として言ったり聞いたりすることがあるが，韓国では「昨日は何を食べましたか？」など食に関することを挨拶として言ったり聞いたりすることがあるそうだ。このように，国民性によって焦点を当てるポイントや表現の仕方が異なることを映画や授業を通して再認識した。

## 5. 韓国民俗村

**佐藤　勇太**

8 月 12 日は文化体験として韓国の京幾道竜仁市（용인시）に位置する，韓国民俗村を訪れた。ここは韓国の朝鮮時代からの伝統や風習などを体験できる観光地であり，外国人観光客だけではなく，韓国国民からの人気も高い。三十万平米という広さの中に韓国の伝統的な家屋やお寺，公園などがあり，実際にタイムスリップしたような感覚になれる。

短期課程の参加者はガイドの説明を聞きながら民俗村を一周したが，特に印象に残っている点は，平民と階級が高い貴族の家屋の違いである。平民の住む家は質素で必要最低限の広さで何よりも，屋根の作りが藁葺きであり，それに対し，貴族の家はとても広く，ところどころに色も使われており，屋根は瓦で作られていた。韓国の大統領府がおかれていた青瓦台の屋根が瓦でできていて，青く塗られている理由が分かった。また民俗村では，中にいる住民も再現されており，平民の着ている伝統服はこれも色がなく質素なもので，それに対し貴族は色が多く使われている派手な服であった。このことから朝鮮時代の韓国では階級制度が浸透していて，身分の違いがはっきりしていたのだと感じた。

ガイドの説明が一通り終わった後は，少人数の班に分かれての自由行動だった。私がいた班は近くにあった大きな食堂で食事をとり，広場で伝統的な踊りのパフォーマンスを堪能した後に，民族文化を知ることができる展示館を訪れた。ここでは展示物が非常に多く，当時の人々の生活がどのようなものだったのかを想像することができ大変興味深かった。その後，民俗村の遊園地に行った。ここでは本格的なアトラクションに乗ることができたり，ゲームセンターでいろいろなゲームを楽しんだりすることができた。最後に民俗村の中にたくさんあるお土産屋を見て回った。時間の関係で全部は回れなかったが，置いてある品数が多く，小さなキーホルダーから大きな置物まで幅広く置いてあり，見ているだけでも楽しかった。

民俗村では，韓国の歴史や伝統を肌で感じることができ，食堂やカフェも多く，遊園地もあるので，年齢を問わず全員が楽しめる場所だと感じた。

## 6. 文化体験

**熊谷　怜**

ここではプログラム最終日である 8 月 19 日に行なわれた文化体験について報告する。

### 6. 1. 餅づくり体験と餅の歴史見学について

当日の朝, バスに乗り 1 時間ほどで景福宮のそばにある餅博物館に到着した。はじめに館内に併設されているキッチンで花餅（ファジョン）とチョルピョンという 2 種類の韓国の伝統的な餅を作る体験をした。花餅はその名の通り花をあしらった餅で，餅の元となる生地をピンポン玉ほどの大きさになるように 10 個から 15 個に分け，綺麗に丸く形成する。その後薄く伸ばしたら油を引いた冷えた状態のフライパンに 6 個ほど並べ，焼き始める。焼き色がつかない程度に焼いたら返し，裏面を焼いている間に先程焼いた面に食用花を載せ，焼き終えたら完成だ。お好みで蜂蜜をかけて食べるとデザート感覚になり非常に美

味しい。韓国では元々結婚や誕生日のお祝いなどの行事や，普段の食事など様々な場面で餅が食べられており，この花餅は季節の旬の花を飾り，季節の変わり目に食べられていた。本来は王宮や貴族の屋敷など庭が広い家で育てられた花を食べていたが，近年では花を育てる家が減っているため，春菊を茎に見立て，ドライフルーツを乗せて花の形にして作る家もあるとのことであった。続いてチョルピョンを作った。こちらは色のついた餅を先ほどと同じように丸めてから薄く伸ばして成形し，中にこし餡を包んでいく。それを木型で潰し，表面に型の模様が浮かんでいたら完成である。この木型の模様はそれぞれに意味があり，今回使った型は幸せになるようにという願いの込められた模様とのことだった。他にも安産祈願や健康長寿などがあり，食べる人のシチュエーションに合わせ，木型の模様を変えて作るそうである。

餅づくりを終え，他の階に移動すると，館内を一周するように餅に関する道具等が年代や行事毎に展示されていたがあまり見ることが出来なかったため，もっとしっかり見たかった。先ほど使用した木型の大型のものや様々な模様が展示されていたり，餅の関わる故事についても展示されていた。

### 6. 2. 市場での昼食について

餅博物館の見学が終わると，景福宮の近くにある市場で昼食を取った。ここでは昔の硬貨を使って自分達だけのランチプレートを作るという体験をした。そこは地元住民が日常的に利用する市場で，入口付近には魚や肉などの生鮮食品が置いてあり，進んでいくとキンパやトッポッキなどの屋台が見えてくる。そこからは各自が事前に受け取った硬貨を使って昼食プレートを作っていく。人気の高い屋台はトッポッキ，韓国風の焼鳥，タッカンジョンなどであった。トッポッキというとコチュジャンベースの赤くて辛い味付けが特徴だが，そこの屋台ではたまり醤油で味付けをした醤油トッポッキがあり，辛いものを連日強いられていた日本からの短期課程参加者は感動のあまり行列を成して，醤油トッポッキを買っていた。オーソドックスなコチュジャンベースと醤油から味付けを選ぶと，目の前の鉄板で調理してくれる。少し薄汚れた下町の屋台から

立ち込める醤油の香りが鼻腔をくすぐり，辟易していた胃袋に空腹というスパイスをもたらしてくれた。各々のランチプレートを作るはずなのにも関わらず，私も含め思わず買ったその場でつまみ食いしている人が散見された。

その後，焼鳥やキンパ，タッカンジョンといった人気の食べ物を揃えつつ，市場の中心部にある建物の中で，ランチプレートでの昼食を食べ終え景福宮に向かった。

6. 3. 景福宮と韓服体験について

まず景福宮の目の前にある韓服のレンタルショップに向かった。韓服とは，日本ではチマチョゴリと呼ばれている韓国の伝統衣装であり，チマがスカートを指し，チョゴリがシャツなどの上衣を指す。つまり，女性用の韓服が「チマチョゴリ」である。また，男性用の韓服は，下衣という意味でパジと合わせて「パジチョゴリ」と呼ぶ。レンタルショップに着いたら自分の着たい韓服を選び，それに合わせて小物入れやカチューシャを選んでいく。女性用はかなりの種類が置いてあるため，色や形や生地など，楽しみながら選ぶことができた。一方で男性用の場合，中に着るインナーとパジは 1 パターンしかないため，サイズを見て店員が渡してくれる。その後に数種類の中からアウターを選んでいく。黒か紫か青で少し柄が違うだけなので，やはり韓服といえばチマチョゴリの方が有名なのにも納得である。気に入ったものに着替えたら，無料で店内にある鍵付きのロッカーに荷物を預け，景福宮へと向かう。

景福宮の周りは普通の街並みで，歩いていると目の前に急に景福宮が現れるような環境である。しかし外門である光化門をくぐると，突如としてタイムスリップしたかのように当時の空気感を感じることができる。自分達が韓服を着ていることと，警備の人も当時の警備員の服を着ていることも相まって，まるで自分達が当時景福宮に住んでいた王族であるかのような錯覚すらしてしまう。そこから自由に散策しながら景福宮の見学をした。しかし，観光できる時間が短く，手前の広場と池の周りを少し見る程度しか出来ず，数枚写真を撮っていると時間がきてしまったため，もしまた行く機会があれば一つ一つの建物

を，歴史的背景を交えながら見学したい。

6. 4. 送別会について

街中での文化体験を終えて，大学にて送別会が行われた。短期課程の初日との違いがあるとすれば，余所余所しさがなくなり，一人一人が気兼ねなく会話できるほど仲良くなったことだろう。しばらくすると電気が消え，スクリーンに映像が映し出された。そこには 2 週間の間に撮影してもらっていた写真や映像を使って作られたメッセージビデオだった。流れ始めた途端，その場にいた日本からの学生はほぼ全員が涙を流しながら見ていた。前半は私達日本人学生が入国してから前日の授業風景までが収められており，成長を思い出と共に振り返りながら見ることができた。後半はそれぞれの班に授業や韓国での生活を助けてくれる「バディ」と呼ばれる徳成女子大学生一人一人が送ってくれたメッセージであった。全員が話し始めるたびに，思わず涙を流してしまった。本報告を書いている 10 月現在でも時折その映像を見ながら泣き，みんなのことを思い出している。

その後，全体のプログラムを通して先生たちが優秀だと推薦した 3 人に，贈呈品と共に修了証が手渡しされた。2 位と 3 位には韓国の伝統的な柄があしらわれた傘が渡され，一位には伝統的な陶器と茶葉が渡された。私も韓国語が分からなかったにも関わらず，ありがたいことに 2 位に選出され，傘をいただいた。その経験があったからか，渡韓前以上に韓国語の勉強を現在も意欲的に続けている。いつか他大学の短期課程参加者や徳成女子大学の学生に再会した時には韓国語でコミュニケーションが取れたらと思っている。

## 7. 終わりに

**黄川田　萌恵**

2022 年度もコロナ禍が続いており，韓国に実際行けるかどうか直前まで正直分からなかった。しかし，実際に韓国へ渡航することができ，全員無事に帰

国することができた。また韓国語がほぼ分からなかった私たち国士舘の学生は，他大学の参加学生や徳成女子大学の参加学生，先生達に助けられながら本短期課程を終えることができたので，感謝の気持ちでいっぱいである。最後に，このプログラムで学んだことや人との縁を大事にしながら，今後もそれぞれの場所で頑張っていきたいと思う。そして，このプログラムに参加して学んだこと，人との縁ができたことは本当に大きな財産であり，参加することができて良かったと心から思う。

**注**

（1） 本短期課程が行われた 2022 年 8 月は日韓の新型コロナ感染症拡大いわゆるコロナ禍における水際対策が緩和され，2020 年 3 月以降初めて韓国への観光ビザの発行が再開された時期であり，毎日 2 万人近くがビザ取得を希望するなか，参加学生たちは短期留学ビザを取得する必要があった。また，2022 年 10 月現在では不要となった出国前 72 時間以内の PCR 検査陰性証明書を提出する必要もあり，出国するための手続きはとても煩雑であったため参加者は大変な苦労をした。

（2） 光化門は古宮である景福宮の正門である。その他に崇礼門（南大門），興仁之門（東大門）等がある。

（3） 川村元気『世界から猫が消えたなら』小学館（2014）

（4） 滝田洋二郎監督『おくりびと』（2008）

（5） イ・ソックン監督『君の結婚式』（2019）

（6） 『SUNNY』は 2012 年に韓国でカン・ヒョンチョル監督により作成され，2018 年に日本で大根仁監督によりリメイク版が作成された。

（7） 『リトル・フォレスト』は五十嵐大輔による漫画が原作であり，日本では森淳一監督により 2014 年に「夏秋」，2015 年に「冬春」の 2 部作として映画化された。韓国では 2019 年イム・スルレ監督により 1 つの作品としてリメイク版が作成された。

（8） 朝鮮時代（1392 ～ 1910）の正宮